

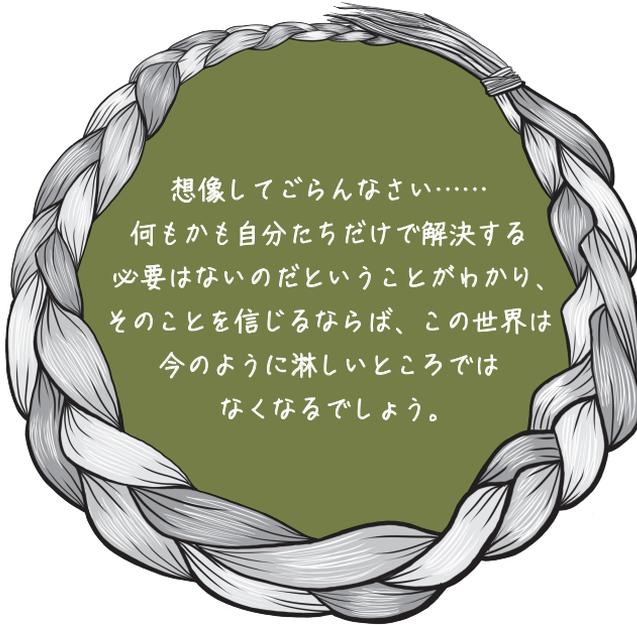
思い出してごらん

私たちは今、私の祖先であるアニシナアベ〔訳注：北米大陸東北部、アメリカ合衆国とカナダの国境一帯に暮らすネイティブアメリカンのグループで、オダワ族、オジブワ族、ポタワトミ族、クリー族、ミシサガ族、チペワ族、アルゴンキン族などが含まれる〕の人びとが予言した、7番目の火の時代に生きています。それは、私たちがともに「思い出す」ことで世界が変わる、神聖な時代です。暗黒の時代でもあり、光に満ちあふれた時代でもあります。暗闇の中で生きるのか、それとも光の中で生きるのか、それを選ぶのは私たちです。よく引用される、虐げられた人びとのこんな抵抗の言葉があります——「彼らは私たちを葬ろうとした——私たちが種であることも知らずに」。

だから、この世界に存在する別の形を思い出してごらんなさい——つながりの中で生きる方法、私たちの親戚である、生きとし生けるすべてのものとの関係性の中で生きる方法を。西欧社会では、親戚というのは人間だけだと考えられがちですが、先住民族のものの方によれば、私たちの親戚には植物や動物も含まれます。世界にあふれる雑音や、自然を商品にしてしまったことで私たちが忘れてしまったかもしれないこと、それを思い出してごらんなさい。あなたはこの世界を癒やす薬になれると知っていた、そのことを思い出すのです。そして願わくば、あなたには（あなたしかもっていない）贈り物があり、世界の幸せのためにどうやったらそれを分かち合えるのかを、思い出し、理解してほしいのです。

レシプロシティー：双方にとって、そしてすべてのものにとって有益になるような、互いに与え合い、依存し合う関係のこと。ただしそこには互いの互いに対する責任も含まれる。

自然こそが真の教師です。生徒である私たちはただ、今、ここで起こっていることに意識を集中しさえすればいいのです。意識を集中させる、というのは、生きている地球とのレシプロシティーのひとつのあり方であり、自然が教えてくれることを、目と、頭と、心を開いて受け取る、ということです。



私は部族のエルダー〔訳注：ネイティブアメリカンの年長者の中で特に知識や経験が豊富で、人びとの尊敬を集める者のこと。単に年長者を意味する場合もある〕たちが「スタンディング・ピープル（立っている人びと〔訳注：木のこと〕）のところに行きなさい」とか「ディア・ピープル（鹿の人びと）と一緒にしばらく過ごすといい」などとアドバイスをするのを聞いたことがあります。植物や動物も、私たちの面倒を見たり、私たちを癒やしたり、私たちの教師や導き手となったりすることができること。人間以外にも知性をもつものはいるということ、彼らは思い出させてくれるのです。想像してごらんなさい……何もかも自分たちだけで解決する必要はないのだということがわかり、そのことを信じるならば、この世界は今のように淋しいところではなくなるでしょう。

はじめに

生命あるもののための文法

「物」のことばかり考えている文化にはふさわしいようにも思えますが、英語と

いうのは名詞を中心とした言語です。英語では、友だちや家族のことを指すときに「それ」とはけっして言いません。親友が試験勉強をしているのを見て、「それは勉強中です」と言ったらどうでしょう？ 失礼ですね。でも私たちは、植物や動物、そして地球のことをそう呼びます。

そう、間違いありません。英語というのは資本主義のための言語であり、「物」についての言葉です。それが間接的に（あるいは直接的に、かもしれません）私たちに、この世界は私たちの持ち物で、どんなふうにも扱ってもかまわない、と思わせます。地球は、私たちが思いやりをもって大切に接するものの範囲の外側に置かれてしまいます——なぜなら、それはただの「物」なのですから。

資本主義：製品を製造するための資源や手段を民間企業が所有し、品物の価格や生産・流通がおもに自由市場での企業間の競争によって決まる経済システム。

ポタワトミ族をはじめ、多くの先住民族の言語は、生きているものを「それ」と呼ぶことができません。もちろん、物を指す言葉はあります。机、トラクター、電話。でもそれらは生き物を指す言葉ではありません。人間がつくった「物」は生きてはいないからです。先住民族の言語には、特有の、尊敬の気持ちを示す文法があります。私はそれを「生命あるものための文法」と呼びます。私たち先住民族は、自然界を指すのに家族を指すのと同じ言葉を使います。だって生きているものはすべて、私たちの家族なのですから。

多くの人は、生きている自然界を「それ」と呼ぶことをとても不快に感じますが、その代わりに使える言葉には「彼」「彼女」「彼ら」しかありません。英語にも、生命あるものすべてのための言葉を取り入れることができないだろうか、と私は考えるようになりました。私はポタワトミ語の先生にそのことを訊いてみました——ポタワトミ語には、生命あるものを指す言葉がありますか？ 物、ではなくて、生命をもった存在を？ 先生は答えました。「ああ、bimaadizi akiという美しい言葉があるよ。地上の生命、地球に生きるもの、という意味だ」。bimaadizi akiという言葉そのまま英語に取り入れるのは難しいけれど、kiというのは「生きた存在」という意味です。後ろにnをつければ複数になって、

「親族」「同類」を意味するkinという言葉になります。

だから、雁が空を飛んでいくのを見たら「Kinが冬を越すために南に飛んでいく。すぐに戻ってくるよ」と言え

kin：親族。生命あるすべてのもの。

いいのです。自然界の話をするたびにこういう呼び方をすれば、そこには私たちと自然界の関係ができます——私たちと自然のつながりが。

ポタワトミ語の言葉を英語の一部として使うことにはちょっとためらいもあります——文化盗用にはけっして加担したくないからです。でも、kiという言葉新しい代名詞として使ってはどうかと私は思うのです。私たちは地球、そして生命あるものすべてとつながっていて、彼らに対して果たすべき責任があるのだということを忘れないために。

文化盗用：ある文化やアイデンティティーの一部を、その文化やアイデンティティーに属さない人が、尊敬の念を欠いた形で無断で借用すること。

kiという言葉は世界中のさまざまな言語の中で広く使われています。それは生命のエネルギーを指していることが多く、生命力を示すchiという言葉の代わりになることもあります。フランス語のquiは「誰」という意味です。スペイン語ではquienですね。

「生命あるものための文法」が当てはめられるのは、生物学で学ぶ生き物だけではありません。たとえば、kiには、岩、山、水、そして火も含まれます。神聖な薬やドラムのように、魂が宿っているものもその一部です。物語にさえ生命があります。

「生命あるものための文法」は私たちに、この世界で生きていくまったく新しい形を教えてください。すべての生物が平等で、ひとつの生き物が支配するのではない世界。それは人間が、水や狼と、そしてお互いに、つながり合い、責任を果たし合う世界であり、自分たち以外の生き物の重要性を理解する世界です。すべては代名詞が決めるのです。

先住民族の言語の扱いについて

ポタワトミ族とアニシナアベ族の言語は、自然と人間の関係を映し出しています。それは、長い歴史の中で比較的近年になるまで書き記されることなく、口から口へと伝わってきた、生きた伝統なのです。表記を標準化するための筆記システムがいくつも考案されていますが、この生き生きとした大きな言語にはさまざまなつづりのバリエーションがあって、そのうちのどれが一番正しいかについて

ははっきりとした合意がありません。ポタワトミ族のエルダーで、ポタワトミ語を流暢に話し、教師でもあるスチュワート・キングは、私の片言のポタワトミ語の間違いを整理し、言葉の意味を確認して、一貫したつづりや使い方ができるようにアドバイスをくれました。言語と文化について理解するために、彼の手引きほどありがたいものはありません。チャールズ・フィエロが考案した二重母音体系は、アニシナアベの言語を話す人びとの多くに使われています。ただし、ポタワトミ族のほとんどは「母音を発音しない」ことで知られていて、フィエロ式の表記を使いません。このように、この言語の話し手と教え手の考え方の違いは尊重しつつ、この本では、私が最初に教わった通りの言葉の使い方をするよう心がけました。

先住民族の物語について

私は物語を聞くのが好きで、私の周りで語られる物語の数々に耳を傾けるようになってからもうずいぶん長い月日がたちました。私は、私に伝えられた物語を語り継ぐことで、それを私に聞かせてくれた先人たちに敬意を払うつもりです。そしてその物語がどこから、誰によって伝えられたのかを、できるだけ明らかにしようと努めました。

物語は生き物であり、成長し、発達し、記憶し、その本質は変わらないけれどまわっている衣は変わることもある、と私たちは教わりました。それは、自然、文化、語り手によって共有され、形づくられていきます。ひとつの物語が、さまざまに違った形で語られる場合もあります。目的によって、断片的に、物語がもついろいろな側面のうちのひとつの側面だけが語られることもあります。この本でお話する物語もそうです。

伝統的な物語は私たちみんなが共有する宝物であり、何かひとつの文献をその原典として特定することはできません。公に共有してはいけななものもあり、そういうものはこの本では紹介していませんが、広く世界で役に立てるよう、自由に広めてよいものもたくさんあります。そういった物語にはさまざまなバージョンがあり、参考文献としては出版されている原典を選んでいますが、同時に、この本で紹介するバージョンは、いろいろな場で何度も聞いたことでより深いもの

になっているということも事実です。中には、口承で伝えられ、出版された原典がわからないものもあります。物語の語り部に感謝します。

植物の名前について

人名は最初の文字を大文字で表記する、ということには誰も疑問をもちません。ジョージ・ワシントンの名前を「george washington」と書いたのでは、彼の人間としての特別な地位を奪うことになってしまいます。飛ぶ蚊を「Mosquito」と書けば笑われますが、それがボートのブランド名ならそれが正しいのです。

言葉の最初を大文字で書くと、それはある種の差別化になり、さまざまな生き物の序列の中で、人間や人間がつくったものに他よりも高い地位が与えられます。生物学者たちの間には一般に、植物を指す一般名詞は、その中に人名や正式な地名が含まれていないかぎりは小文字で表記する、という慣習があります。そのため、春の森で最初に咲く花、赤根草はbloodrootと小文字で書きますし、カリフォルニア州の森林に咲くピンク色の百合はKellogg's tiger lilyと書くのです。些細なことのように思えるこの文法的な規則ですが、これはじつは、人間は周りの生き物とは違っているばかりか、より優れている、という、深く根ざした人間の思い込みを表しています。一方、先住民族の考え方では、すべての生き物を「人」と捉え、縦の序列ではなく円を描く、すべて同等に大切な存在であると認識します。

そこでこの本では、私の普段のやり方と同様に、このような文法的な目くらましを避け、それが人間であろうとなかろうと具体的な「人」を指すときにはMaple (メープル)、Heron (鷺^{サギ})、Wally (ウォリー)、分類上の区分や概念を指すときにはmaple、heron、human (人間) と書くことにします〔訳注：この日本語版ではあまり関係のない話だが、英語を学ぶ上では大切な視点〕。

生きているものすべてと自分がつながっている、とはじめて感じたときのことを覚えていますか？